



## 親鳥と雛

堀 七 藏

### 一

私の家に雛を四羽飼つてゐます。素人の養雛のことですから利益が目的でもなく、また多くの卵を産せてお蔬菜の補助とする野心がある譯でもありません。さりとて子女の保育上に大に利用する子供の遊び仲間として雛を飼ふといふ理想からでもないのです。只友人から一羽の雌鳥が四羽の雛を育てゝゐるものを、「子供達の遊び相手に差上げませう」と送つて貰つたのを育てゝゐるの

であります。これは昨年九月頃の話で、可愛い雛を観たり餌を與へたり、また水をやつたりすることが七歳の女兒と四歳の男兒との日課のやうでありました。この親鳥と雛とが確かに子供達の遊の中心であり、お話の題目であつたことは事實であります。それは兎に角として四羽の雛は次第に成長して二羽の雄と二羽の雌とが出来本年正月から卵を産むに至つたので私共の目的は卵を得ることに變化しました。雄二羽に雌三羽では不經濟

であるといふ養雞家の言に従つて、一羽の雄は他へ始末いたしました。私の「親鳥と雛」の話はこれから始まるのでありますが、茲に一寸御注意までに申して置きたいことがあります。それは親鳥に孵化せられ養育せられた雄が同時に孵化した二羽の雌鳥の夫であり、また養育して呉れた親鳥の夫であるといふ事實であります。何も雛のことそんなに行々しくいふ程の事實でもありませんが、若し人間の社會に親子が夫婦生活をするといふ事實があつたならば、また一夫多妻の現象があつたならばどんなものでせうか。人間にはそんな動物的な現象がないと濟ますことが出来るとよいのであります。が果して世にこの雛の如き生活をなす人がないでありませうか。

## 二

今は何日頃であつたか記憶してゐませんが、三羽の雌の中の親鳥（これは子供達が一見して「あ

れは親鳥よ」といふものであります。子供達の觀察が正しければ昨年雛を育てた雌鳥でありますから、これから他の雌鳥と區別するために第一の親鳥と名づけて置きませう。この第一の親鳥が巢につきました。申すまでもなく鳥類の巢は卵を孵化し雛を飼育する場所であります。鳥屋の隅の所に第一親鳥はすはり込んで朝から晩まで、晩から朝まで鳥屋から飛出することがありません。卵を二三個抱いてゐるやうであります。子供達は「親鳥が朝から卵を産んでゐてお米をたべませんよ」といつてゐます。二日に一度位は巢から飛出して餌をとり水をのむが、また糞も出すが、直に巢に入つてどんなことがあるも見むきもいたしません。こんなことを繰返すこと廿一日位になつたとき、子供達は大騒してゐます。「可愛い雛が産れましたよ。親鳥の羽の下に隠れてゐますよ。そら一寸頭を出したでせう。親鳥がうれし想にしてゐます

よ。」と、わざ／＼私を呼んでの報告であります。

「今日も一羽出ましたよ。これで三羽になりました。ソリヤ皆な可愛いヒヨコですよ」と子供達は大喜びです。人間の子供がこんなに喜ぶのでありますから親鳥はどんなに嬉しいことであらう。二十一日殆どのまず食はずの孵化が成功して、漸くビョ／＼の鳴聲を聞いた親鳥の喜悅。彼は本能的に孵化の難業に従事したものに相違ないから孵化した雛を見て別に満足したの、母性愛に長月日の辛苦を慰藉する心情がないのでありませう。しかし私は彼が本能的に孵化の難業に従事せるあとを考へて萬物の靈長をはこる人類で、この親鳥の眞似をなし得ないものがありはせんか。二十日の短時は十ヶ月の長きに比し問題にはならぬに相異なる。しかし二十日間でも親鳥の精進生活、孵化のために一切をさへげたる親鳥の苦心、否本能を考へるとき、聊か以て範となすべきではあるまい

か。少くとも一部の人々に反省して貰ひたいやう氣持がするのであります。

### 三

三羽の雛が出た後の親鳥の生活は實に母性愛の權化であります。餌をつゝいて雛を呼び、コココと餌のとり方水の呑み方までを指示し、寒ければ翼の下に雛を入れ、暖き日には背に飛上る雛を眺めなが／＼一時も巢を離れず、一心に雛の成育を希ふが如き親鳥の愛。如何に本能とはいへ實に感歎の外ないのであります。

この第一親鳥が巢について十五六日も経た後、第二親鳥が巢について離れませんか仕方なく彼の本能に任せてまた卵を孵化させることにきめたのであります。これもまた二十一日の難事業に成功して、また可愛らしき四羽の雛をかへしたのであります。子供達は始の三羽に後の四羽の雛で大喜び。一切の世話は殆ど三人の子供達の仕事であ

ります。私が日曜日あたりに鳥屋の掃除などをする外、一切は尋三の男兒と尋一の女兒とが世話し二人が學校に出かけてゐない時は五歳の男兒が是等の親鳥と雛とを中心にして遊ぶといふ有様であります。是等から考へると幼稚園などには是非雛を飼育したいと思ひますが相當に費用もかゝり面倒もあることは勿論であります。従つてどこでも必ず雛を飼育せねばならぬと主張も出来ませんが、雛に限らず兎でも鳩でも出来るならば幼稚園や小學校では非飼育するやう工夫したいものでもあります。

## 四

既に第一孵化の雛三羽は三十日もたつたからそろ／＼親鳥から離してもよいであらう。と考へましたから是等三羽の雛を第二の親鳥の所に移したのであります。そして親鳥は鳥屋の方へ入れました。茲で事實を有の儘にお話せねばなりません。

雄鳥は大に喜んだのであります。また第三の雌鳥が雄鳥とゐたのでありますが、久しく分れてゐた第一の雌鳥を迎へて雄鳥は非常に喜んだことでありませう。人間でさへこの雛の世界に見る事實があることを否定出来ないから一夫多妻の雄鳥が喜ぶのは全く無理もありますまい。更におかしいことには、第三の雌鳥とこの第一雌鳥との争であります。雄鳥の歡迎に引きかへ、雄を獨占してゐた雌鳥が、久しくゐなかつた雌鳥を迎へての嫉妬喧嘩が悲惨であります。元を考へると自分の親であるもの、久しくは本妻たりし雌鳥が孵化のため五日別居生活せるものが再び夫の所に歸つたときに示した雌鳥の嫉妬。これから人間社會に於ける妻妾の關係を想像して私は雛の本能も人間も左程程がないやうに思はれたのであります。嫉妬といふ二文字、共に女扁を附けたる理由も思はれて嫉妬の心理は單に人間のみではなく動物の本能であ

るかを三歎したのであります。かくいへばこの雄鳥の殊更らしく新しき雌鳥を歓迎する態度の下品なる、また笑ふべきこと、世の男子たるもの須らく戒心すべきではないかと警告したのであります。

## 五

親鳥仲間の妬嫉喧嘩が行はれてゐるかと見れば、こちらでは繼子いづれが始まつてゐる有様であります。三羽の雛鳥は第二の親鳥の巢に移されたが、四羽の弟雛があり、また親鳥もゐますから別に變つた態度を示しません。相變らず親鳥の背に飛上がり餌を求め水をのむことに努めてゐるのであります。小さな雛であるからと特に迫害するが如き様子もありませんが、親鳥は明白に自ら苦心して育てた雛と區別してゐるのであります。小さき四羽の雛が翼の中にもぐり込むときは喜んで之をはぐむが、大きな三羽の雛を翼の下に中

々入れません。強ひてもぐり込まんとすれば嘴でつゝく。背に飛上らんとすれば特に頸をまげて大きな雛をつゝく、餌を求めてゐるとつゝき、水をのんでゐるとまたつゝく。遺憾なく繼母根性を發揮して繼子扱をなす有様は正しく人間生活に屢々見る所と毫も變る所がないのであります。この有様を見た子供達は私に「大きな雛が可愛想です。親鳥が意地悪をしてつゝきます。雛が恐しがつて逃げますから早く別にして下さい。雛が可愛想です」と申しますから止むなく私は大きな雛三羽を別の巢箱にかへさねばならなくなりました。あゝ繼母と繼子。雛の生活にもこの繼母と繼子との關係が本能的にあるものか。大なる利害關係もなく食する餌にことかゝず、廣ければ十羽でもはぐむに足る翼があつても、僅に三羽の他から來た雛さへ入ることが出来ないものか。自ら育てた四羽の雛と何等異ることなきも彼の親鳥にとつて邪魔

物なるか。

## 六

親と親、親と雛との關係は純ではないが、さて雛と雛との生活は實に愛すべきものがあります。

今まで見たこともなき三羽の雛が突然に侵入し來るも彼等は何等意に介する所がありません。一見舊知の如く、また兄弟の如く、共に餌を求め水をのむ有様は實に愛らしき極であります。しかし非道の親鳥にいじめられる大きな雛は私の手によつて別居するに至つたが、さて親鳥がゐません。ビョ／＼と親鳥を探し求むること切であります。餌をついばむときの外、切りにビョ／＼と鳴いて親鳥を求めてゐます。彼等を育てた親鳥もまた母性愛を消失せぬと見え、コ／＼と盛に雛を呼んでゐます。しかし遠ざかるものは日々に疎しい人間社會の常例に漏れず彼等も一日一日と親を慕ひ雛を愛する本能が薄らぐと見えます。ビョ／＼の鳴聲もコ／＼の呼聲も次第に數少くなりました。

## 五〇

尤も親鳥が雛を呼ぶ聲は五六日で殆ど聞かなくなりましたが、雛のビョ／＼は十數日もつゞきました。殊に夕方就眠する頃になれば雛は溫かき親鳥の翼を求むるが如く、ビョ／＼と鳴きつゝ三羽相互に箱の隅に相擁する有様は實に可憐の極であります。親の子を思ふ心は既に消失せるも、子の親を慕ふ情は尙ほ強烈なるものがあることを雛の生活に於ける事實として私は經驗して何となく感ずる所があるのであります。かゝる現象が單に雛だけに見分らる事實として平氣にすまされないやうな心地がしてなりません。

以上最近私が雛の生活に於て觀察した結果を特に本誌に於てお話いたしました精神は賢明なる讀者が御推測下することと思ひますので更に蛇足を添へる必要がないと存じます。只雛と人間とを混同するやうな説明をして人間を下等視する傾があります。これは人間生活を十分に熟慮したいと考へるからであります。